

ボルダリングジム利用者のクライミング関与についての研究

杉上 早紀 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 林 綾子

キーワード: クライミング, アウトドアレジャー, スポーツ関与

1. 緒言

近年,メディアの影響により人気が高まっているクライミングは,2020年の東京五輪の追加種目に決定した事からも普及が期待される。スポーツやレジャーの場面における動機づけに関する研究はこれまでに行われてきたが,関与についての研究はまだ始まったばかりである。関与とは,「特定の刺激あるいは状況によって引き起こされた動機づけや関心の高い状態」¹⁾と定義されている。関与について明らかにする事は,活動への参加頻度だけでなく,活動に関わる製品の選択や購入,サービスに対する評価等に役立つ²⁾といわれており,マーケティング面への汎用性が深いことから,近年注目が高まっている。本研究では,クライミング関与測定尺度を作成し,クライミング関与の因子を抽出することを目的とする。また,得られた因子について個人属性による比較を行い,多様な目的を持つボルダリングジム利用者のクライミング関与について明らかにすることを目的とする。本研究結果より,クライミングの普及へのサービスや指導における基礎資料が得られることを期待する。

2. 研究方法

【調査対象】2016年7月から10月にかけて,関西に存在する6件のボルダリングジムに訪れた18歳以上の男女合計242名。

【調査方法】レジャーの動機や,関与の要素を参考に「健康,重要性,勝利性,アイデンティティ,交流性,楽しみ」の6因子20項目で構成する調査用紙を用い,アンケート調査を依頼した。回答が得られた242名のうち欠損値の多い回答は省き,234名(初心者28名,初級者65名,中級者85名,上級者&エキスパート52名,不明4名)を分析の対象とした(有効回答率96.6%)。

3. 結果と考察

1) クライミング関与の因子抽出

「重要性」,「健康」,「コミュニケーション志向」,「交友関係の拡大」,「アイデンティティ」の5因子17項目が得られた。スポーツ関与やアウトドアレジャーとの共通性がみられ,クライミングの特性を表していると考えられる。

2) 技術レベル別クライミング関与比較

【重要性因子】・【アイデンティティ因子】どちらも技術レベルが高いほど得点が高く,ライフ

スタイルにおいてクライミングが中心的な位置づけであることが伺える。また,クライミングを通して自身を示すことに強い意識があることが考えられる。【健康因子】技術レベルが高いほど健康のためにクライミングをしているという意識が低いことから,技術向上など他の目的意識の方が高いことが考えられる。【コミュニケーション志向因子】技術レベルが高いほど,技術や課題等,様々な情報交換も含めクライミングに関する会話や交流を重視していると考えられる。【交友関係の拡大因子】技術レベル間での有意な差はなく,関与の内容としては全体を通して他の因子と比べて低かった。

表1. 各因子技術レベルの平均値,標準偏差,分散分析結果

	初心者	初級者	中級者	上級者&エキスパート	F値
重要性	2.87 (0.74)	3.53 (0.69)	3.64 (0.73)	4.07 (0.72)	18.13***
健康	3.74 (0.87)	3.71 (0.93)	3.47 (0.97)	2.67 (1.16)	12.06***
コミュニケーション志向	3.38 (0.72)	3.69 (0.59)	3.86 (0.85)	4.29 (0.49)	17.69***
交友関係の拡大	2.79 (0.93)	2.64 (0.89)	2.82 (0.93)	2.81 (1.22)	0.50†
アイデンティティ	2.33 (0.68)	2.57 (0.59)	2.66 (0.68)	3.14 (0.77)	10.81***

4. まとめ

ボルダリングには,「課題」を達成するという問題解決的要素があり,より難易度の高い課題をクリアするにはそれなりの努力や継続が必要になることから,上級者&エキスパートの「重要性因子」,「コミュニケーション志向因子」,「アイデンティティ因子」の関与が高い結果になったと思われる。このことから,クライミング関与には技術レベルが関係すると考えられる。クライミングは,より深く関り,レベルアップしていくというスポーツ特有の楽しさや,筋力や体力に合わせてクライミングを行う健康的なレジャーとしての活動の楽しさもあり,その関与においてもスポーツの要素とレジャー的要素の両面がみられた。今後も幅広い目的でのクライマーの関与を高めるために,誰もが安全に取り組み,また,課題達成や技術向上の楽しさが味わえるよう多様な難易度の課題のセットや,クライマーが交流できる環境整備が,関与の向上や継続に繋がると考えられる。

引用文献

1) 坂口俊哉・菊池秀夫(2001)スポーツ活動における関与測定尺度の開発:日本語版 Involvement Profile の作成と検討. スポーツ産業学研究, 2:11-22.